

西南学院旧制専門学校経済科第2回卒業 榎田裕一氏に聞く

戦後の苦しい時代とアメリカ文化の流入 イデオロギーが交錯した時代

実施日：2012年9月5日

実施場所：西南学院本館3階 談話室

語り手：榎田裕一氏

榎田裕一氏と西南学院旧制専門学校の略歴

- 1944年4月 西南学院高等学部を西南学院経済専門学校と改称
- 1945年9月 引き揚げにより釜山中学校から旧制糸島中学校に転校
- 1946年4月 経済専門学校を西南学院専門学校（英文科、経済科）と改称
- 1947年4月 西南学院旧制専門学校経済科に入学
- 1949年4月 新学制による西南学院大学学芸学部開設
- 1950年4月 西南学院旧制専門学校を卒業し、九州大学経済学部入学
- 1953年4月 西日本相互銀行に入社
- 1954年3月 西南学院専門学校廃止

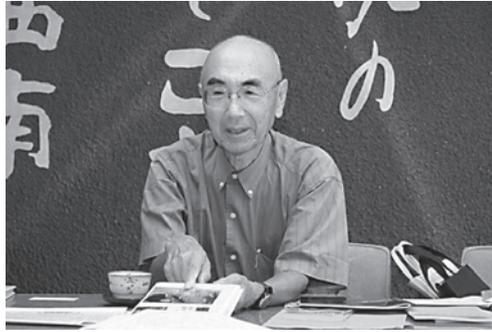
◇明るく陽気な校風

父親の仕事の関係で朝鮮半島の釜山に生まれ生活していましたが、1945（昭和20）年の終戦に伴って日本に引き揚げることになり、まず旧制糸島中学の4年生に転校しました。卒業後、当時の流行で「弊衣破帽」、いわゆるツギをあてたマントにボロボロの破れた学生帽をかぶって街を闊歩するという、そういう一つの旧制高等学校の独特の文化に憧れて旧制福岡高等学校を目指しましたが、かなり入学試験が難しくして不合格になりました。

浪人するよりも私立に、ということで福岡経済専門学校¹と西南学院専門学校を受けて両校とも合格しました。どちらに行こうか悩みましたが、七隈は遠かったし、西南は街中であって非常に便利がよく、雰囲気的にも非常に明るいミッションスクールということで、独自の魅力がありました。そういう理由で西南に決め、それから3年間お世話になりました。

専門学校での勉強は、大学の教養部のように幅広く、科目がバラエティに富んでいました。当時は公立と私立を比較すると、学費が3倍くらいの差があったん

1 現在の福岡大学



▲「西南時代は貴重な時期だった」と語る榎田さん

じゃないかと思います。国民は戦災に遭い裸一貫になって引き揚げてきたり、親兄弟がバラバラになっていたりで、個人個人は大変貧しい時代でした。ですから学費の安い公立に行った方が家計が助かるんですが、やはり競争率が高いので不合格者はやむなく私立に行くという感じでした。あるいはそんなに勉強しなくても、学歴を身につけて親の家業を継ぎたいという人は専門学校の卒業と同時に職に就いていました。つまり、少し学歴を積んで、すぐ商売や自営業あるいは就職しようと考えて、この学校を選んだ人が多かったようですし、学費が高いから自然に裕福な家庭の子弟が来ていたように思います。そういう意味ではハデというか、旧制高等学校生が「弊衣破帽」で闊歩しているのに対し、ここは非常に綺麗でクリーンな服装の学生が多く、明るく陽気な校風を持つ学校でした。悪い言葉で言えば「坊ちゃん学校」というようなイメージもありましたね。

◇資本主義と共産主義

専門学校では私は経済科で学びましたが、『日本永代蔵』という江戸時代の文

学作品を教科書として勉強した授業が印象に残っています。この『日本永代蔵』というのは、浮世草子と呼ばれる江戸時代の文学で、大阪商人の意欲と盛衰の物語を書いた井原西鶴の代表作です。好色物と武家物と町人物がありましたが、私たち経済科の学生は商売成功の秘訣や接客のやり方が参考になるのではないかと、これがテキストとして選ばれたものと思います。

それから、小泉信三著の『共産主義批判の常識』。この本がちょうど私たちの学生のころのベストセラーだったんです。その少し前まで小泉氏は慶應義塾大学の塾長をしていましたが、古典派経済学の立場から共産主義とマルクス経済学を研究した上で合理的な批判をしたものと評価されていました。また小泉氏は彼自身がクリスチャンで、キリスト教徒の立場から書いていますので、西南の学生の中で非常に人気がありました。当時、学生間でも、宗教と唯物史観に立つマルクスの思想との関係をどのように理解するかで議論が行われており、これらを踏まえた学内弁論大会や討論会が本館（現大学博物館）の講堂で盛んに行われていました。1951（昭和26）年にサンフランシスコ



▲商経会の先生と仲間たちとともに
(最後列右から2番目が榎田さん、最前列右端
が大村匡先生：1949.1)

講和条約が結ばれますけれども、ソ連や共産圏を含めての全面講和をした方がいいのか、アメリカを中心とした自由圏だけの国々との単独講和がいいのか、それを弁論大会や討論会のテーマで議論を闘わせたようなことがありました。私も学内弁論大会に出て、第2位の表彰状をもらいました。タイトルはよく覚えていませんけどテーマはそんなことだったと思います。そのころ社会科学研究会と商経会という学術研究を行う2つのサークルがあって、どちらかという共産党系の考え方に近いのが社会科学研究会の方でした。はじめは私も両方に入りましたが、だんだん商経会の活動が中心になっていきました。会計学の大村匡先生がその顧問で、研究会や論文発表など先生に鍛われて一生懸命勉強していましたよ。

◇グリーククラブ

学生時代といえば、男声合唱団のグリーククラブに思い出がありますね。やはり戦争を機に時代が変わって、戦時中は

軍歌ばかり歌っていた世の中が、戦後、突然ロシア民謡や黒人霊歌などを歌い始めたんです。そういうジャンルの音楽があるんだということが分かってカルチャーショックを受けました。私が入学した時はグリーククラブもすっかりできあがっていて、全国合唱コンクールで優勝するなどの確たる成果を上げており、合唱音楽は全盛期にありました。私には歌う能力もなかったけれど、友人の勧めで連れられてグリーククラブに入り、男声合唱の重厚なハーモニーにすっかり魅了されました。楽しかったですね。

グリーククラブには、石丸寛氏と松本省一²氏という2人の指導者がおられました。石丸氏から、薦の絡まる赤レンガのチャペルでグランドピアノを取り囲み、直接指導を受けたのを覚えています。九州交響楽団の初代常任指揮者としても著名な石丸氏も、まだあの頃は髪が黒々として、とってもダンディーでモダンな青年でした。若い時の石丸氏の風貌が非常に強く印象に残っています。

もう1人、松本さんは地元にしっかり根づいていて、福岡を中心に地道な合唱振興活動をされていました。グリーククラブとは別にライラック合唱団という九州の合唱団の草分け的存在のグループを結成し、以来、半世紀以上、九州のアマチュア合唱団のリーダーとして活躍されました。ひところ私もそこに籍を置いていました。当時、大学の合唱部というのは少なかったのではないかと思います。九大にはコールアカデミーという男声合唱団が戦後もまもなく生まれていました。娯楽に飢えていた時代だったんですね。グリーククラブは大正時代に誕生していましたが、合唱音楽という一つの新しい文化がいち早く西南で花を開いたというのは、

特筆すべき先見性があったのではないかと思います。

◇旧制と新制の過渡期

ちょうど私たちの学年が学制改革の過渡期で、旧制、新制の2つの学校が並立していました。新制の学制改革が私たちの在学中に瞬く間に進んで、1947(昭和22)年に新制中学校、48年に新制高等学校、49年から新制大学となるわけですが、旧制度の最後の学年までは旧帝国大学へ進む道が残っていましたから、新制大学ができるというニュースを聞いても私たちはそれほど強い関心がなかったと思いますね。ですから私たちが西南学院専門学校を卒業した時、経済科及び英文科も含めまして、20数人が旧制の九州大学に進学したと思います。

旧制福岡高等学校から進学するのがオーソドックスなルートでしたが、専門学校からも傍系とって、平等に入学試験を受けることができ、一定レベル以上の人は合格しました。旧制大学の修業期間は3年で、新制大学の場合は4年だから卒業が1年遅れたと思います。九州大学に入ってから本格的に基礎理論やマルクス経済学の財政論、金融論、貨幣論などを勉強しました。経済学としてのマルクス経済学というのは、政治的なイデオロギーとは別にして、当時は非常に理論的で説得力がありました。ちょうどソビエトや中国などの共産圏が健在な時代で、徐々に学生運動が激しくなりそうな雲行きでした。

◇戦後のイデオロギー

戦時中は日本共産党が非合法になって

地下にもぐっていたのが、戦後、解放され、いろいろな指導者が出てきて日本共産党が復活するわけです。それで世界が社会主義陣営と自由主義陣営に分かれるようになるのが、1947(昭和22)年ごろでした。1948(昭和23)年に、朝鮮民主主義人民共和国、いわゆる北朝鮮の建国があり、それから翌年になると中国が中華人民共和国として成立しました。このような状況の中、日本も国内では日本共産党が復活しました。それで、西南学院の中にも共産党の下部組織、当時「細胞」と呼んでいましたが、西南支部というのができたんです。それで、学生は「自由・独立・平和」と大きく書かれた日本共産党のバッヂをつけて、あたかも時代の先端を行くかのようにキャンパス内を闊歩する学生が何人もいましたね。そういう時代背景で、共産主義、唯物史観、いわゆる無神論と西南学院のキリスト教、聖書の教える神様による情操教育という、非常に相対立する考えがありました。当時の授業科目に「思想史」というのがあって、ちょうど国内にも教会が数多く建てられてキリスト教やアメリカの文化が入って来ると、一方では共産党の復活という両方のイデオロギーがありました。まさに青春時代そのものであった西南時代は、音楽文化とのめぐり合いやキリスト教と社会主義思想の交錯の中で、自分なりの人生観や宗教観が形づくられていきました。

◇物の豊かさ

当時、アメリカ進駐軍の操車場が香椎にあって、RTO³と呼んでいましたが、そこにあった占領軍のための大きな貯蔵

倉庫で物資の運搬や貨車の積み下ろしのアルバイトをしていました。アルバイトと言えば聞こえはいいのですが、単なる肉体労働でアメリカ兵の監督の下、酷使されていましたね。びっくりしたのは、大きな倉庫がいっぱいになるほど物が豊かだったことです。野菜やパンなんかすごくいい匂いがして、アメリカの豊かさへの憧れというのがありましたね。振り返ってみると、そのころ私たちは日本の歴史や文化に自信を失っていたかもしれません。今は2000年を超える日本の歴史・文化の蓄積が再評価されて、堂々と胸を張って相手に情報発信できますけれども、当時としては文化財などは経済成長の妨げになるからとずいぶん取り壊されていたと思います。とにかくあのころは、文化というよりも経済が重要で、まず食べること、衣食住の確保が最優先でした。

◇アメリカ文化が大流入

もちろん占領下の日本で、街中にもあちこちにいる進駐軍の姿が見られましたが、それとともに日本に新しいアメリカの文化が大量に入ってきました。それまで日本のナショナリズムに基づく教育を受けてきた者にとっては、西南は特殊な学校に感じられました。とにかくアメリカ人が学内にたくさんいて、直に接触できて英語を学べるということは、大きな特徴でした。また、当時は日本の国全体がアメリカ文化に目覚めるという時代でした。全国的にコココーラが入ってきたり、畳から椅子の生活に変わったりと、アメリカナイズされて生活様式も変わっ

てきました。アメリカの文化、衣食住に非常に憧れがあったと思います。その当時は、時代背景として食糧難とインフレで、日本の国力も戦前の半分くらいに落ちこんでいましたので、経済の復興のために鉄と石炭の大増産計画というのを立てて、「傾斜生産」と言っていましたけれども、そしてアメリカの援助と国の援助によって経済がなんとか保たれていました。1949(昭和24)年にデトロイト銀行の総裁でジョゼフ・ドッジ氏が来日して、いわゆるドッジ・ラインという財政金融引き締め政策を実施しました。その時、「竹馬経済」という言葉が使われていて、「日本経済は両足を地につけていず、竹馬にのっているようなものだ。1つはアメリカからの援助、もう1つは国の補助金の支出である。それを全部払拭しなさい」といって、インフレを抑制するためにもすごいデフレ政策をとられたのがドッジ・ラインです。

そのあとすぐ朝鮮動乱が起こって好景気がやってきましたから、私たちの在学していた1947(昭和22)年から50年の春までが一番日本経済の苦しかった時代でしょうね。とにかく、国も赤字、企業も、家計もすべて赤字でした。

このように日本も含めアジアでは大変な苦境にありましたから、ガリオア資金やエロア資金という、いわゆるアメリカの公的な資金による援助を受けました。それに対してララ物資⁴は、民間のボランティアの援助による救援物資でした。今ちょうど日本がODAでバングラデシュやミャンマーなどに衣料品の援助をしたりしていますが、当時の日本がそれと同じような状態にあったわけです。私

4 LARA ; Licensed Agencies for Relief in Asia : アジア救援公認団体が提供していた日本向けの援助物資のこと

も西南学院の在学中に、ララ物資で背広の配給を受けたということがありました。ただサイズが大きすぎて戸惑ったということがありましたけどね（笑）。ララ物資は、どういうふうに配布されたのか知りませんが、学校の中で配布されました。宗派を超えたアメリカの宗教団体や労働団体などが戦後、食糧難の日本に支援物資を送って来てくれたんです。教会が中心となって行った援助なので、南部バプテストあたりがいろいろ手を尽くし、援助してくれたのではないかと思います。当時は本当に助かりました。

◇次代の国際人としての若き学生諸君へ

これからのグローバルな時代は意思疎通やコミュニケーションが重要で、やはり外国語を学ばなければいけません。西南は、せっかくミッションスクールで外国人の先生や学生と直に触れ合うチャンスが非常に多いわけですから、そういう能力を身につけて国際的に活躍してもらいたいと思います。そういう点で非常に恵まれた環境にありますから、西南に望むことということになれば、これからのグローバル時代に対応した人材を養成するような方向が望ましいと思います。たとえば国際会議で堂々とコーディネーターやモデレーターを務めるなど、単に英語を話せるというだけではなく、難しい内容を理解して適切なコメントをする、そういう人材が今からは必要じゃないでしょうか。

それともう1つは、日本の歴史、伝統文化というものに深い知識を持っておかないと、本当の意味での国際人にはなれないんじゃないかと思います。私も、九

州国立博物館を英語で案内するボランティアをやっていましたけれど、たとえば元寇の歴史を英語でどうやって説明するのか、日本の対応やその後の鎌倉幕府のことなど、外国人に分かりやすく英語でどうやって表現し、説明するのか。自国のことに知識がないと薄っぺらで表面だけの翻訳になるので、深い知識に裏づけされた語学力で自信を持って、それを発信できる能力が必要です。そして相手が誰であろうと卑屈にならず、対等にこちらの考えを主張し、相手の言い分も聞き分けて、お互いに文化の違いというものをよく認識した上で交流をするということ。それがこれからの国際人として重要じゃないでしょうか。

◇西南学院に感謝

西南時代の記憶はかなり薄れましたが、その時勉強したこと、遭遇したことが頭の中にいろいろと残っていて、それだけは間違いなし、勉強させてもらっただけでもありがたいと思います。とにかく今は想像もできないような激変の状況で、日本の国自体が生きるか死ぬかといった本当に際どいところを歩いていた時代にちょうど西南にいて、しかも青春の真っ只中と重なっているわけですからね。そういう意味で、一生の歩みの中でも非常に強烈な印象があります。そんな感受性の強い時に西南学院で、いろいろな人と接し、またいろいろな知識を学んだということは非常に意義が深いし、その後の人生に与えた影響も大きいですから、自分にとって大切な、かつ貴重な時期だったことは間違いのないと思います。